

# 初年次教育の効果と課題 (3) : スポーツ科学科におけるアクティブ・ラーニングの利用と有効性

大東文化大学スポーツ・健康科学部 春日芳美、田中博史、  
只隈伸也、佐藤真太郎

## Outcome and Additional Challenge of First-year Experience(3):The Use and Effectiveness of Active Learning Methods in Department of Sports Science

Yoshimi KASUGA, Hiroshi TANAKA,  
Shinya TADAKUMA, Shintaro SATO

### 1. はじめに

本稿は、初年次教育における効果的なアクティブ・ラーニング (active learning) (以下「AL」と略す) の手法を検討する一助として、大東文化大学スポーツ・健康科学部スポーツ科学科の1年次必修科目である「フレッシュマンセミナーA」で行ったALの取り組みの事例を報告するものである。

「フレッシュマンセミナーA」は、スポーツ科学科の前期開講科目であり1年生を中心としたおよそ140名が一度に受講する必修の大規模授業である。大規模授業におけるALは、学生数の多さや成績評価にかかる時間と手間、教室環境といった問題から用いる教育方法が制限される(中井、2015、p.151)。しかし、1講義あたりの受講者数を少なくすることは教員コストや教員一人当たりの持ちコマ数の制限の問題からみても難しいのが本学の現状である。本学では、2016年より「ALを加速する学生リーダー育成プログラム」<sup>1)</sup>を継続的に行う等、現在全学的に積極的なALの導入を進めており、今後よりよい大学教育を実現するためにも大規模授業における効果的なALの手法を確立し共有する必要があるだろう。

また、初年次教育の効果と課題については、これまでスポーツ科学科の事例を継続して報告してきた(春日ほか、2014、2015)。これまでにフレッシュマンセミナーA/Bで行ってきたマナー講座や地区清掃活動といった内容もALとしての性質を十分に備えていると考えられるが、今年度は新たなALの手法としてPBL(Project Based Learning)<sup>2)</sup>を取り入れ、その成果をプレゼンテーションするという学習課題を設定した。そこで本稿では、大学初年次における効果的なAL手法の有効性の検討として「フレッシュマンセミナーA」の授業内で行ったグループディスカッションを中心

としたPBLの事例を報告したい。

## 2. 大学教育におけるAL

ALの定義は複数みられるが、大学教育において最も一般的に用いられるのは2012年に中央教育審議会から出された以下の定義であろう。

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。(中央教育審議会、2012、p.37)

このように、大学教育において一般的に行われている講義法(ある学習内容について、講師が口頭で説明し学習者が要点を記録しながら学習する方法)では十分な教育効果を得ることが難しい「技能」や「態度」といった学習目標に対して、より高い学習効果を発揮する可能性のある手法がALであるといえる。ただし、大学教育におけるALは全く新しい学習方法というわけではない。「学生に発言させる、議論させる、書かせる、発表させる、小テストを受けさせる」(中井、2015、p.7)といった活動はALの定義の範疇であり、「演習、実験、実習、実技、卒業研究、卒業制作」(中井、2015、p.7)などの授業形態での学習もALである。意図するかしないかに関わらず、多くの教員は講義内でALを取り入れていると考えられ、「従来型の講義スタイルとALのどちらの方法を採用すべきかは、二者択一の問題ではない。むしろ、現実には、二つの方法が組み合わせられて実践されているとあってよい。」(岩井、2006、p.24)とされる。

また、ALに関する重要な指摘として、「アクティブラーニングは手段にすぎない」というものが挙げられる。

学生にさまざまな活動をさせても学習につながらない可能性もあります。……学生は、学習の質ではなく、アクティブラーニング自体に満足感を覚えるかもしれません。しかし、アクティブラーニングは手段であり、教員は学習自体が質の高い学習につながるよう学習活動を設計し、実際に質の高い学習になっているのかどうかを確認することが必要になります。(中井、2015、p.7)

講義にALを取り入れることに気をとられ、実際の学習がどのような成果を挙げているのか(いないのか)を確認しなければ、形ばかりで中身の無い学習活動となってしまうという点を忘れてはならないだろう。そのためにも、学習目標の明確な課題を設定し、学習の成果を適切に評価してフィードバックすることが必要である。

### 3. 「フレッシュマンセミナー A」における AL

スポーツ科学科1年次必修の「フレッシュマンセミナー A/B」では、学習態度の育成や帰属意識の醸成といった講義法だけでは学習効果を得ることが難しい学習目標を達成するため、さまざまな活動を行ってきた<sup>3)</sup>。すでに報告したこれらの教育内容は、定義からみても AL ということができ、すでに高い学生満足度が得られているが、今年度は AL の新たな手法として PBL (Project Based Learning) を取り入れ、最終週のプレゼンテーションを含めてディスカッションやフィールドワーク (現地調査)、アンケートなど3週にわたってグループごとの活動をおこなった<sup>4)</sup>。スポーツ科学科では各学年が A、B、C、D の4つのクラスに分かれており、同じクラスに所属する学生は授業を通じてそれぞれ面識があるため、今回の活動では各クラスの学生が同一グループに入るように1グループあたり5名ないし6名を学籍番号順に24グループに振り分けた。討論の課題は4つ用意し、教員側でグループごとに指定した。課題は以下の4つである。

1. 新しい総合体育館の設置について
2. 新しい学生食堂の設置について
3. スポーツ科学科で取り組む新しいイベント案について
4. 大学への新しい商業施設誘致について

ALにおけるすぐれた学習課題の定義として、1) 学習目標に沿っていること、2) 自分で考えないといけない課題であること、3) 学生の関心と能力に合った課題であること、が挙げられる (中井、2015、p.31-32)。「フレッシュマンセミナー A」の目的は、大学生として学ぶ姿勢作りと、学科全体の仲間意識の向上、大学への帰属意識の向上である。これらの目標を達成する手段として、グループディスカッションを通して自分たちの所属する大学のキャンパスやイベントについて理解を深め、そこから新しい案を検討することは非常に有益であると考えられる。また、キャンパスの施設やイベントは学生生活に直接的に関わる内容であり、学生の関心を得やすいという点で初めてのグループディスカッションの課題として効果的であると考えられた。

初回の授業ではグループに分かれる前に、担当教員が書画カメラを使い学生が行うプレゼンテーション形式を想定して課題の概要を説明した。この際、実際にキャンパスの施設を調査したり、学生や職員にアンケートをとって現状の課題を把握することも議論を深めるためには必要であるという点を例示しながら説明した。その後、グループ編成表を全体に配布し、以降はグループごとの活動とした。翌週 (2回目) の授業内で、最終週の発表後の学生アンケートをもとに最優秀グループを決定して表彰する旨を学生に伝えた。そして最終週には、90分間の授業時間内に24グループすべての発表が終了した。それぞれのグループの発表を評価するために、学生には各自記名式の振り返りシートを記入させ、結果を集計してその後の授業内で最優秀グループの発表及び表彰を行った。

## 5. 授業後アンケートの分析

授業後アンケートでは、グループディスカッションに対する意見はおおむね好意的であった(表1)。ただし、授業評価との関連で、回収したアンケート用紙が記名式であった点はアンケート結果に少なからず影響していると考えられる。

なお、各質問に対して「いいえ」と回答した学生について、以下において自由記述の部分からその理由と考えられる部分を検討したい。

表1 授業後のアンケート結果

質 問	はい	いいえ	未記入
充実した議論をすることができましたか	109	7	17
グループの中で自分の役割を果たすことができましたか	110	6	17
グループの成果に満足していますか	105	10	18
グループで協力して活動することができましたか	112	3	18

### 1) グループ分け、グループの人数について

1 グループに5ないし6人としたグループの人数については、「ちょうどよい」とした学生が大半であった。その中でみられた意見としては、「役割分担を均等にして進めることができた」、「ちょうどよい人数で、誰かがさぼったりしたらできないのでよかった」というように役割配分をするのに適切な人数であったと考えた学生が多くみられた。また、「グループの人数はちょうど良かったが、グループの数が増えてしまったため授業内の発表がぎりぎりになってしまったと思う」という意見もあった。

人数について記述した学生の3割程度が、「人数が多い」と回答した。意見としては、「少し多い気がしました。4人くらいがベストだと思います。発表しない人も出で来るので」といったものや、「まだディスカッションの練習段階だから人数は少ない方が全員が話し合いに参加するようになると思う。6人だと自分はやらなくていいやと思う人が出てしまうので少なくすべき」というように、議論をする上でグループの人数を少なくした方がよいという意見のほか、「意見はたくさん出るが作業になると何もしない人が出てしまった」と、役割分担の関係で人数を少なくすべきという意見があった。

そして、「人数が少ない」という意見が少数みられたが、「グループを減らして人数を増やすべき」、「もっと多い人数でも議論してみたい」等の内容で、5, 6人で議論を行うことの問題点は特に挙げられなかった。

グループの編成については、「全く知らない人とグループになったけど、出身地や部活などの話で打ち解けた」、「全員しゃべったことのない知らない人ばかりで最初は会話はずまずに不安だったけど、みんなで役割分担をしてグループディスカッションをしていくうちに仲良くなれて交流の

輪が広がってよかった」、「関わりのなかった人たちとのグループディスカッションは新鮮で面白かった」というようにクラスをまたいでのグループ分けが非常に好意的に受け取られた。

しかし一方で、各クラスの学籍番号順にグループ分けをして学生の性別については考慮しなかったため、元々人数の少ない女子学生がグループに1人になったり男子学生のみグループができた。この点については、「女子一人はやりにくかった」、「男子のみのグループがあったり偏りがあった」、「班の男女比を考慮すべき」といった意見がみられた。

また、クラスをまたいだグループ分けについては好意的な意見が多くみられたものの、「クラスや部活のちがう人たちでのグループだったので授業時間以外になかなか集まることができなかった」というように時間割等の関係上、授業以外に集まり学習をする時間をとることが難しかったことが指摘された。

## 2) 発表の準備期間について

発表の準備期間については、ちょうどよかったとする意見と短かったという意見が同程度みられた。「ちょうどよかった」とする意見では、「全ての準備を済ませるには十分。一人ひとりが仕事をしっかりこなせば達成できるくらいで絶妙な時間」、「長すぎてもだらだらしてしまうと思うのでちょうどよかった」、「計画的に準備すれば十分間に合う」という意見がみられた。また、「休み時間を使って何とか間に合った」、「調査の期間を含めるとこれ以上短くすることは難しいと思う」との意見が挙がった。

時間が「短かった」とする意見は、「もう一回くらい準備期間が欲しかった」、「発表の練習ができなくてグダグダしているグループもあったので、もう少しだけ時間があつたらよかったと思った」、「授業以外の時間で時間を作れたら期間は十分でしたがなかなか全員の都合が合わず少し期間が足りなかった」といったものがみられた。また、「授業時間にはもうやることがない状況でしたが、資料などを作ったわたしにとっては自宅に持ち帰りプレゼンの段取りを考える時間が足りなかった」といった意見もあり、次年度以降は授業時間外の学習の活用が重要であることを事前説明で十分行い、今年度のように全3回の内容を継続していきたい。

## 3) 良かった点

良かった点については、グループの活動について「誰かががんばるのではなく、仕事をしっかり分担して準備も発表もできた」、「全員が意見を出せたので、全員で取り組むことができた」、「パソコンでスライドを作りながら議論したことで早く終わった」というようにグループ内で協力して活動できたことを評価する意見が複数みられた。また、「知らない人とやるのがよかった」、「アンケートを取りにいろいろな人に声をかけたりして、今まで話したことのない人とも話すことができたのでよかった」というように、新しい出会いに対する肯定的な回答がみられた。

そして、他のグループのプレゼンテーションを聞くことも良い刺激になったようである。「いろいろな班の個性的な考えが聞けたこと」、「他の班のいろいろな意見を聞くことができ、そんな発想



もあったのかと驚くことがあり、とても面白い授業だった」という意見や、「同じテーマの班があることで自分たちの班と比べられること」と他のグループとの関係を挙げる意見があった。

今回の活動を通じての意識の変化を挙げた学生も複数みられた。「自分がどの役割を担い、グループのために何をすればよいのか考えるようになった」、「相手にうまく伝えるにはどういった工夫が必要か?」など考えるようになった」というように、自身の意識の変化を感じている学生が複数おり、今回設定した学習課題は本科目の学習目標を達成するために効果的であったと考えられる。

また、各グループの提案内容については「本当に実施してほしい提案も多かったのでぜひ参考にしてほしい」という意見もあり、学生から出た案をどのように活用することができるのか検討することも今後の課題であるといえよう。

#### 4) 改善した方がよいと思う点

改善した方がよいと思う点については、個別のグループについての改善点と、今回のディスカッション全体についての意見がみられた。

自分たちのグループについては、「発表内容をもっと具体的にした方がより良い発表ができた」、「最後の方にあせってやっていたので、もう少し余裕をもってできるようにしたい」、「もう少し調査をした方がよかった」、「もう少しいろいろな人にアンケートを取るべきだった」というように、段取りや発表内容についての反省が複数みられた。また、「話し合いに参加しない人に声をかければよかった。全体的にもう少し積極的に行動していったらいいと思う」、「個人それぞれの授業に対する姿勢に差があり、やる人とやらない人が分かれたこと。温度差がでてしまいやらないならそれでいいと思ってしまい、私が進めてしまったのも悪かったが、もっとみんなでできればよかった」というように取り組みが積極的ではない学生への関わりを反省する意見や、「プレゼンテーションの作成を人に任せすぎた」、「パソコンを持っている人がやってくれたので頼ってしまった」というように自身の取り組みに対する反省がみられた。グループの活動に非協力的な学生は、本人の学習成果が十分に得られないだけでなく、その態度がグループ全体の雰囲気や課題の出来にも影響するため、早い段階での教員の介入やより効果的な課題設定及び評価方法の設定が必要であろう。授業後のアンケート(表1)の自分たちのグループの成果に満足していないとした10名は、ここで挙げられたような理由で成果に対する満足度が低かったと考えられる。

ディスカッション全体についての改善点では、最も多くの指摘があったのがメンバーの配分の仕方であった。グループ分けの項でも触れたが、グループメンバーの男女比を検討すべきという意見が多く、学生から出された。次年度以降の課題といえよう。

また、今回用意した4つの題については、「題の数を増やした方がよい」という意見が複数みられた。これは、「題に対する結論がありきたりなものになってしまっただけで他のグループと被ってしまう」等、議論の結論が他のグループと重複することに対しての意見であるが、他のグループとの違いを出すことも今回のディスカッションの重要な課題のひとつであり、実際に題の数を増やすべきかどうかは検討が必要であろう。実際、前項3)でも触れたように、良かった点として「同じテー

マの班があることで自分たちの班と比べられること」を挙げる学生もおり、複数のグループで同じ題を扱うことの意味を事前に説明することで学生が受ける印象も変わってくるのではないかと考えられる。この他、題については「与えられる題によって考えやすいものと考えにくいものがある」、「もっと難しい内容のディスカッションにした方がいい」、「議題を学内でなくより広い範囲のものにする」といった意見がみられた。

プレゼンテーションについては、「事前に発表の見本を見せてしまうとみんなその通りにしてしまうのではないか」という意見があった。実際、今回の発表では多くのグループが事前に課題を説明した際の発表形式を踏襲していた。「発表形式をもっと自由にしても面白かったかもしれない」という意見もあり、今回は書画カメラに限定した資料説明を、より自由度を高くすることも検討したい。また、「期間が短く発表練習ができなかったので時間を多くしてほしい」、「発表の練習を各班もう少しすればいいと思う」、「発表のとき、メモを読んでいるだけの班がとて多かった」といった指摘があったことから、発表練習の重要性とそのため時間配分をするよう事前に伝えることが必要であったと考えられる。実際プレゼンテーションについては反省が特に多くみられ、「もっと発表の練習をすべきだった」、「発表に参加していない人がいたのでみんなで発表すればよかった」、「発表の仕方がダメだった。もっと何回か練習しないと人前に立って話すということはできないと思う」というように準備不足を感じた学生が多く見られた。

また、「アワードをやるならもう少し早く言ってくれば全体的にもっとやる気や盛り上がりがあった（注、2 回目の授業内でアワードについて連絡を行った）」、「個人個人、真剣に議論に取り組めていないと感じた。ディスカッションの内容を成績に加味したらもっと真剣に取り組めたと思う。課題についても学生に発見させるのがよいと思う」という意見がみられた。評価されない活動に対して意欲をもたない学生も多くいる（中井、2015、p.65）という点からみて、今回の活動ではどのような評価方法をとるのかを初回の時点でより具体的に伝える必要があったと考えられる。また、評価方法についてはグループ内の個人の取り組みを評価する必要等も検討し、より学生が意欲をもって取り組める工夫が必要であると考えられる。

その他に挙げた意見としては、以下のようなものがあった。

- ・席が前向きなので話し合いがしづらい
- ・現実的にできることを考えるべきなのか、費用などを考えず夢のようなことを考えていいのか、を決めてから統一して考えたほうが良い
- ・発表内容と提案内容の違いがよくわからず評価しづらかった
- ・話し合いに参加しないで人任せな人がいると困る
- ・24 班分の発表を 1 時間でするのは少し厳しい

このように、今回の学習活動に対する学生満足度は高かった一方で改善点の指摘もあり、次年度以降の AL への取り組みにこれらを反映させることでより良い学習活動を行うことが可能であると考えられる。

## 5) その他

その他の自由記述では、「また今後も違った、もっと知恵と知識が必要なものに挑戦したいです。また人に聞き入ってもらえるようなプレゼンの話し方も身に着けたいです」、「これからもグループディスカッションを行って、人前に出て人にうまく伝えられるようなプレゼン力をこれからもつけていきたいと思った」、「機会があったらまた別のグループで違う題について話し合ってみたいと思った」というように、今後もグループディスカッションを行いたいとする肯定的な意見が複数みられた。

また、「スライド係をして、どうすれば見やすいか、まとまって見せるためにはどのような構成にすればいいのかと考えてスライドを作ることが楽しかった。ちょっと違う自分を発見できた」、「自分たちで大学内の施設について考えることで改めて自分たちの所属している大学のことを知ることができ、また、アンケートをとることで学生の実態が知れていい経験になった」という意見から読み取れるように、今回の課題では「フレッシュマンセミナー A」の目的である、大学生として学ぶ姿勢作りと、学科全体の仲間意識の向上、大学への帰属意識の向上という3点を効果的に達成することができたと考えられる。

また、「準備期間中、なかなか話が前に進まず「これでいいんじゃない？」と投げやりな態度のメンバーに少々うんざりしましたが、そこに突っ込んで状況を変えようとしなかった。これからは授業だろうが周りの態度に納得いかないときはどんどん具体的に発言していきたい」といった意見や、「まとまりのある班とない班が、発表をみてわかった」といった意見から、やはりグループでの活動に非協力的な学生への対応が重要であるということが明らかになった。グループ内で個人を相互に評価する方法や教員の介入など様々な方法で活動への参加を促すことが必要であろう。またこの点については、およそ140人の学生に対して4人の教員で対応を行っているため、今後より多くの教員によるサポートを行うことについても検討が必要であると考えられる。

## 5. まとめ

今回フレッシュマンセミナー内で行ったグループディスカッションと一連のプレゼンテーションは、授業後アンケートの結果からも非常に満足度が高かったことが明らかになった。その主な理由としては、クラスをまたいだグループ分けによってそれまで交流のなかった学生と知り合いになれたこと、グループ内で協力して課題に取り組んだこと等が挙げられた。このようにほとんどの学生が今回の課題について肯定的であった理由としては、スポーツ科学科の学生は複数のスポーツの実技授業を受講しており、常にAL的活動を行っていることからグループによる問題解決学習に苦手意識を感じる事が少ない傾向にあることが考えられる。スポーツ科学科における初年次教育の中心カリキュラムであるフレッシュマンセミナー A/Bは大規模授業であり、効果的なALを行うためには工夫が必要であるが、今回の成果から学生の学習意欲を高めたり学生間のコミュニケーションを円滑にしたりといった効果がみられること、学習目標を効果的に達成できる可能性があるといった



点から今後も継続的に AL を取り入れていくことが望ましいと考えられる。

しかし一方で、グループの男女比や活動に非協力的な学生への不満があったことは見逃せない。特に活動に非協力的な学生については、それがほんの少数であってもグループメンバーの課題に対するモチベーションに大きく影響すると考えられるため、グループ内で個人を相互に評価する方法や教員の介入など様々な方法で彼らの活動への参加を促すことが必要であろう。

以上のように、今回行ったスポーツ科学科における AL を取り入れた授業では、グループごとの成果に格差が出るなど教員側の反省点は複数あるものの、学生の授業満足度はおおむね高かったといえる。今後も初年次教育における学習目標を効果的に達成する手段として積極的に授業へ AL を取り入れ、より高い学習効果を得る方法を検討していくことが求められるだろう。

#### 参考・引用文献

- 岩井洋 (2006) 初年次教育におけるアクティブラーニングの可能性. リメディアル教育研究 1 (1) :22-28.
- 春日芳美、田中博史、只隈伸也、佐藤真太郎 (2015) 初年次教育の効果と課題：スポーツ科学科「フレッシュマンセミナー」の事例から. 大東文化大学研究紀要<社会科学> 53:21-34.
- 春日芳美、田中博史、只隈伸也、佐藤真太郎 (2016) 初年次教育の効果と課題 (2) : スポーツ科学科「スタートアッププログラム」の事例から. 大東文化大学研究紀要<社会科学> 54:1-12.
- 中井俊樹編著 (2015) アクティブラーニング、シリーズ大学の教授法 3. 玉川大学出版部
- 中央教育審議会 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)、文部科学省

#### 注

- 1) 大東文化大学アクティブラーニング [http://www.daito.ac.jp/class/active\\_learning/](http://www.daito.ac.jp/class/active_learning/)
- 2) PBL (Project Based Learning) とは、「大枠のテーマに沿って学生が自ら課題や目標を設定し、その解決や実現に向けて自ら計画し、実行する過程から学習する技法。・・・学生の主体性が最大限尊重されること、現実の問題を扱うことが特徴。・・・教員はあくまでも学生が深い学びを得られるようにするためのサポート役である」。(中井、2015、p.174)
- 3) 詳しい内容については、春日ほか (2014、2015) を参照。
- 4) スポーツ科学科では、以下のディプロマ・ポリシーにも掲げているように「問題解決能力、コミュニケーション能力、関係調整能力」といった諸能力を重視しており、それらの能力の育成には AL が効果的であると考えられる。

#### 〈スポーツ科学科ディプロマ・ポリシー〉

スポーツ科学科は、所定の単位を修得、以下のような知識や能力、さらに態度を身につけた学生に卒業を認定し、学士 (スポーツ科学) の学位を授与します。

1. 豊かな人間性と社会性の基となる幅広い教養を有し、スポーツ科学に関する専門的知識や技能を総合的・学際的に理解し実践することができる。
2. 熱い情熱、高い行動力、強い責任感を持ってスポーツ科学の英知を実践にまで高め、地域社会及び国際社会のニーズに応えることができる。
3. スポーツ活動を通じて修得する問題解決能力、コミュニケーション能力、関係調整能力、等の諸能力を活かしてスポーツ・健康文化の向上及び振興に貢献できる。

(2017年9月29日受理)